

## 第二章

### ポール・クローテルの『日本短詩集』

(*Petits Poèmes japonais*)

#### — 共同的話作の可能性 —

## 第一節 『日本短詩集』にみるクローテルの創作姿勢

### 1 はじめに 作品紹介

一九三三年十一月五日刊行の *La Revue de Paris* という文芸誌に、ポール・クローテルは *Petits Poèmes japonais* (私訳『日本短詩集』) と題して、日本近世・近代歌謡五首と小林一茶作の一句を「翻案」し、自作として発表した作品がある。のちクローテルはその詩集に訂正を加え、一九四五年に単行本として再版を志せた<sup>(1)</sup>。このフランス大手出版社ガリマール社によるその再版は *DODOITZU* と題して四二五部も刷られ広く流通し、クローテル全集<sup>(2)</sup> などに所収され、今日においてもよく知られているものである。再版にはわずかな(主に句読的な)修正がおこなわれたうえ、一茶の一句が取り除かれ、代わりに歌謡一首が増補された。おそらくクローテルは詩集の統一性を配慮し、唯一口唄文学(歌謡)ではなかった一茶の発句を排除したのである<sup>(3)</sup>。訂正を経た再版が『日本短詩集』ではなく『どいつ』と改名されたのも、シヤハルの統一性に対する配慮を示しているものといえよう。また、再版 *DODOITZU* において、十二篇の作品順序が大きく変更され、英語の部分訳やハニタ・リハク<sup>(3)</sup> による挿し絵が添えられた。

本節では *La Revue de Paris* 誌の初版 *Petits Poèmes japonais* を使いつつ、クローテルの創作姿勢を考えることにする。

クローテルは『日本短詩集』の「ページ目」<sup>(4)</sup>、作品の成立過程を次のように説明している。

これらの詩は、東京日仏学院教授シヨール・シヨ・ポノー氏が出版した大衆書庫の詩集の中から「どいつ」として豊民の詩作にもどつて、あくまでも自由に翻案を考えたり、または発想を奪つたりして出来たものである。(その歌)

ここでクローテルがいつシヨール・シヨ・ポノー氏の「詩集」とは、あの有名な『日本詩歌選集』のことで、フランスにおける初期日本語の翻訳集を指すのである<sup>(5)</sup>。シヤック・フタヤの注釈によると<sup>(6)</sup>、作品成立は一九三三年の夏とされている。クローテルはポノーの翻訳集のページの欄外に草稿を書き込んだり、または紙切れをページの間に挟んだりして、日本の歌謡(十二篇と一茶の句一句のフランス語訳から発想を奪いながら詩作に取り組んだ)といっているのである。

なぜ晩年のクローデルは「このような詩作法を選んだのか。その詩作のしかたは、老詩人の、潤れた発想」を補つための文学的戦略だったのか。それとも、クローデルの「翻案」には、独創的なものがあるのか。『日本短詩集』の作品として元になった日本の作品（日本語文やボノ一訳）との関係を中心に、クローデルの創作姿勢をつかつかつこととする。

## II 原作品の選択について

『日本短詩集』の発想源となったボノ一編『日本詩歌選集』に所収されている作品は「Dodoitsu」と呼ばれている作品――十六首 短歌(Tanka)――五首 俳句(Haiku)五首 新体詩(Shintaishi)――三編 合計日本詩歌三〇六編として構成になっている。「Dodoitsu」の部に関しては、実際、以前のボノ一の別の選集『日本民話における詩的表現』(7)の三冊本から採録したものである。ただし、『日本詩歌選集』にはローマ字による日本語原文が記載されているのに対して、『日本民話における詩的表現』には原文が日本語の文字(日仮名遣い)で載っている。内容に関しては、いわゆる「都々逸節」の歌詞はほとんどなく、七七五調の近世民謡がその大部分である。童唄・小唄などもみられる。つまり「Dodoitsu」として選集の項目名は相応しくなく、いわゆるを違なののである。しかし、著者ボノ一のこの入訳語訳(以下、と記す)は大変正確なもので、真訳に近いといつてもよいだろう(以下日本語原文を と記す)。クローデルはボノ一のこの入訳語訳に基づいて、たとえば次のような作品「一つびと」を創っている(以下クローデルの作品を と記し、筆者によるその日本語訳を と記す)。

### II 〇 L'AMOUR AVEUGLE

Parce que je vous aime,	じなた眼くは
Plaines, torrents, montagnes,	野もせも(∞) 山も
Broussailles, forêts,	やぶも林も
Sans rien voir, je suis venue.	知らで来た

### D'UN SEUL BOND

Je t'aime je suis venue	<u>一つびと</u> 君が好きと私は来た
Les torrents et les montagnes	激流も山も
Les forêts et la campagne	森も野原も
Je ne m'en suis pas aperçue !	なにひとつ目に入らなほ

II 〇で、クローデルの作品は原作品の意味に非常に近いと注目される。日本語の原文は『山家豊田

歌』(なんぢなほまほむか) (一七七六年刊行) という近世民謡集の「山城国風」(やましろこけいふう)の部一一番歌に出ている。ボノーは近畿地方の歌としてこれを『日本民謡における詩的表現』の一一八番歌に載せている。この民謡は『日本歌謡類聚』(大和田建樹編・博文館・明治三二)の下巻 山城国 全歌の項にもみられるのでボノーがどの出典によったかは不明である。ボノーの翻訳は大変忠実だが、原文になし題「恋は盲目」(L'AMOUR AVEUGLE)を付けることにより、作品の意味を説明している。若賀徹氏がすでに指摘したように<sup>(9)</sup>、クロートルも題を付けるが「一つどひ」(D'UN SEUL BOND)と改めて、詠め人の熱心さを強調するのでもある。その他クロートルの「翻案」はボノーの訳文をほとんど変えていないといえよう。この作品について若賀徹氏は「そこには『旧約聖書』のなかの、パルスチ高地の民謡を素材にしたという「雅歌」の一節の味わいたえある」<sup>(10)</sup>としている。あるいはクロートルはロマンの「グーソ」を連想しながらこの歌の翻案を作ったこと思ったのではないが、その名作の堀口大学訳を思い起こしてみよう。

朝の風冷たくもむが、前髪に玉なせし縋ひやうけん  
 野の露に総(そら)の身ぬれてわれは来ぬ  
 誰ぞ わが疲れ、君が褥(じよ)の端の端に懸(か)いつつ  
 やがて来(こ)ん安(やす)らけむ君を時をば懸(か)えるを<sup>(11)</sup>

いずれにせよ、西洋のみやびな恋謡詩の伝統に既存する感性が、明らかにこの民謡にもあるといえよう。つまりクロートルが『日本詩歌選集』所収の歌謡一一六首のうち、この民謡を選んだのは偶然とはいえない。そしてこの場合、クロートルはボノーの翻訳をほとんど変えなくても、美しい四行詩(quatrain)に蘇(よみが)えることに成功しているのでもある。

日本語の原作品を一覽するに、恋の歌といえども、素朴で暖やかな発想の民謡が多いことに気づくのである<sup>(12)</sup>。事実、クロートルは近代の都々逸特有の好色趣味などはほとんどみられない労働歌や童謡を主に選択したのである<sup>(13)</sup>。

ここでクロートルの、優れた文学的感性による原作品の選択・編集には、作家活動における独創性を認めてよいのかという問題が残る<sup>(14)</sup>。たとえば、先のこのフランス語の詩「一つどひ」はクロートルの才能によるものなのか、それとも日本の民謡のもともとの美しさに頼るものなのか。シラネ・ハルオ氏によると、個人的な想像力の「非制約的な可能性は、西洋の伝統においてきわめて高く評価されているものである」<sup>(15)</sup>といわれているが、『日本民謡集』にクロートルの個人的な想像力は働いているだろうか。

たしかに先の「一つどひ」の場合、クロートルによる原作品の鋭い選択のしかたは、個人的な想像力には頼らないが、『旧約聖書』やロマンの詩の連想を起すことにより、原作品よりも深い意味合いを表現することに成功しているといえるのではないが、つまり、異なる詩歌伝統に置き換えられるだけで、日本民謡の一部はもともと西洋詩に生まれ変わるきっかけになるということになる。

さらに、原作品(日本語文またはボノー訳)になかった音調的要素、多くに脚韻の使用

(venue/aperçue, montagnes/campagne) せいじのそと クロトリスはつひへく語法程の韻文性を  
脚韻として用いし事も注目されるものなり。

### III 音韻の考察について

11112 脚韻の使用について もつ一節をとりあげしめしむ。

#### 1111 UNIONS

Sur le prunier, le rossignol ; 梅にびくひす  
Le cerf au pied de l'érable ; 紅葉に鹿よ  
Et vous et moi mêlés comme 私とも前は  
Poisson et eau ! 魚と水

#### POISSON

#### 魚

Le cerf parmi le mélèze 落葉松(まもろ)の中には仕鹿  
Le pinson dans le bouleau 白樺の中には花鶯(まどり)が  
Et nous tous les deux mêlés そして私たち二人  
Comme un poisson dans l'eau 魚と水のちつじ 結ばれた

日本語の原作品の出題に關しては、これも近世日語で、一八〇七年刊行の『潮来風(うたかぜ)』、  
一五回雜歌(『近世文芸叢書』一巻『俚語』所収)に記載されているものである。その原作品の  
一四回目に明解な脚韻「ウメ・クロトリス」として音韻的技法がみられる。そして、四回目の「ウメ  
//ス」には「びくひ」として脚韻が使用されている。小林路島氏によると、「日本古語文法」の韻  
の主流は、最も意識的な語句の末尾に置かれる脚韻ではなく、語句の頭に置かれる句頭韻  
である。(16)とされている。ボウーの訳文を校註すると、音韻的技法がまったく使用されてい  
ないことがわかる。それに対して、クロトリスの作品では、明解な脚韻(mélèze/mêlés, bouleau/dans  
l'eau)をみとめることができる。「mélèze」の語尾「ze」を除けば、完全な交差韻(rime croisée)の四  
行詩となつており、また全詩の句末が同じ流音(voyelle liquide)の、r、e、(lèze/lés, leau/l'eau)を使  
用するという技法が注目される。クロトリスは交差韻や流音を使用し、「魚と水のちつじに結ばれ  
た」恋人の歌に堅も相応しい、しなやかな音韻を選んだものに違いない。これは『日本擬詩集』の  
一三回題のうち、一三回には明らかな脚韻をみとめることができる。クロトリスは、ボウーの『日本  
詩歌選集』に記載されている日本の原作品のローマ字読みをみただけ参考にしたかは不明であるが、  
老詩人の手によって、脚韻を多用する日本の原作品の音韻は放棄し、脚韻を重視するつひへの

昔歌伝統に置き換えられているのである。脚韻を失うのを避けるためにクローテルは語彙や語順を若干変えているが、先の詩篇の場合、梅の木は遠藤松(かほまつ)に、紅葉の木は日樺に、鶯は花鶯(はなうり)に変わっただけで、著しく発音が改まったといえまい。

つまりここでクローテルの創作の工夫は主として音韻的な面に限るので、語彙や語順の変更には明解な作意を認めることができないだろう。ただ、詩の意味は交差韻や流音の使用と長書に支えられていて、そこにこそ大詩人の才能がひそかにあらわれているといえる。

#### 四 比喩表現の多用について

『日本短詩集』の発源となった原作品について、よく民謡を中心とした歌謡(五五直を)一覽すると、和歌・俳句といった短詩形に比べて比喩表現の多用が目立つているといえよう(12)。とりわけ人間とその他の生物・無生物を比較するような表現が著しく多いのである。たとえば、先に引あげた『潮来風』の民謡の表現に関して、恋人を魚と水にたとえた表現、いわば擬人化の逆の関係になる“擬物化”という比喩表現が印象的である。擬物化に関して、ボナーの『日本歌謡選集』とクローテルの『日本短詩集』の表現を比較してみると、二二篇のうち、ボナーの翻訳集に使用された擬物的表現は六箇所、クローテルの詩集には八箇所となっている。つまり、クローテル作には、比喩表現をさらに増やそうとする傾向があるといえるだろう。例をみよ。

##### 111 CONFIDENCE

Là-bas, ce que vous voyez,	あれにみゆるは
C'est la maison de amant :	殿御の屋方
Et chère m'est la fumée	煙立つのが
Qui s'en élève.	なつかしい

##### FUMÉE

##### 煙

Cette fumée là-bas qui fume	あそこになち上がる煙は
C'est mon amant qui se consume	燃えている我が恋人だ

原文の出典に関していえば、『日本歌謡集成』第十一巻(高野辰之編・春秋社・昭和四)埼玉県の童謡の部と山口豊大里群の雑謡の部に同じ歌が記載されている。原文にもボナーの訳文にも「煙立つのがなつかしい」(Et chère m'est la fumée Qui s'en élève.)とあり、クローテルの“翻案”においては、「煙があのまじと音略化して表現されており、煙そのものが「燃えている我が恋人だ」(C'est mon amant qui se consume)と断言され、新しい比喩性、はつきりとした擬物化が生じてい

る。

次に擬人化の使用を比較してみよう。二六篇のうち、ボノの翻訳集に使用された擬人的表現は六箇所、クロツルの詩集には一〇箇所にはぼる。擬人化の場々はクロツルによる比喩表現の増加がさらに明らかになっている。例として、『日本短詩集』に所収された唯一の発句を觀賞したい。

二三 TÉNACITÉ

Escargot,	蝸牛
Tout doux, tout doux, va, monte	そろ／＼登れ
Le Fuji !	富士の山

L'ESCARGOT ALPINISTE

登山家かたごもり

L'escargot à l'escalade	山を登るかたごもり
Sac au dos s'est mis en campagne	リュックを背負って遠征く出かけだ
L'escargot à l'escalade	山を登るかたごもり
Va digérer la montagne !	山を食み尽くものだ。

原文の出典は、一茶没直後に刊行された文政十二年（一八一九年）版『一茶発句集』（一）に記載されている。富士塚の富士語を題材に句作されたものと思われる。『文政句帖』に「蝸牛ともども不にく上る也」（文政六年）や「蝸牛気永に不にく上る也」（文政八）という類句があり、一茶晩年らしい作品であるといえよう。一茶調の典型的な表現法や題材（小動物）の扱い方をみまわることができ、蝸牛を登山家に、見立てる、よくな作品になっているのである。そこで、クロツルの手に渡ると、もともと見立てにまわっていた表現は大胆な擬人化に発展し、一つだけではなく三つの擬人的義が生まれてしまったのだ。事実、擬人化・擬物化の使用は、どちらか人間とその他の生物・無生物との境をなくすよくな表現として、農村的表現の著しい特徴であるといわれているのである。たとえば、フランス農村史論『風土の臨終』に、ウシエン「ヴェブ」氏はフランスの農村地における比喩表現の多用をとりあげている。

農民の言語表現は大發鮮やかなもので、エスプリや叙情性に溢れているものである。たとえば、ヴァンター地方の田園地帯では、小牧場のことを、牛のハカチ、(mouchoirs à bœufs)とよんでいた。また、シャパーニコ地方でぶどう栽培を営んでいた小作農たちは、れに住まぬ大地主を、つまり自分たちの雇傭者のことを、豆のちや、(cosses)とよんでいた。ニエール地方では、慥して何かを実行するといつのを、人を噛みつく犬ちのちや、(comme les chiens mordent les gens) と言ひたりしていたのである。（一〇）

農民出身の俳人小林一茶の俳諧についても、擬人法の多用が明治期から指摘されている。擬人化とともに、擬物化の多用も、『父の終養日記』以降の一茶の作品に、大發目だっていることが特徴的

である(一〇)。

ともかくクロードは 民謡の翻案においても 一茶の発句の翻案においても 擬人化や擬物化を増やしたり それを強調したりしているのである。その理由は 西洋詩人が伝統的に比喩表現を重視してきたという慣習にかかわるものであるかも知れないが 農民的な表現を強調しようという作意もあつたと思える。また 民謡を中心とした原作品の中に あえて一句だけ地方俳人小林一茶の作品を選んだこと そしてその一句の擬人的表現を大きく強調したことには クロードの一茶に対する深い理解をつかかっているに違いない。

## 五 本歌取的な創作について

『日本短詩集』には 原作品の題材を教語だけ残して “元句だ” の意味全体を改めるものが、少なくも三箇所(III 七 八番歌)にみられる。例として 三番歌をとりあげよう。

### III AUX DANSES DE LA FÊTE DES MORTS...

Aux danses de la Fête des Morts,	盆のをどりじ
Pour ne pas danser, faudrait être	踊らぬやつは
Bouddha de bois, bouddha de fer,	木佛金佛
Bouddha de pierre !	石ほんけ

### A LA FÊTE DES MORTS

### 死者の日に

Bon dieu de bois bon dieu de fer	木の神様よ 鉄の神様よ
Bon dieu de pierre !	石の神様よー
A la fête des morts	「死者の日に
Tu n'iras pas danser !	踊りに行くな」と
A la fête des morts	だれに言われても
Qui peut m'en empêcher ?	「私は死者の日に踊るのよー」
Bon dieu de bois bon dieu de fer	木の神様よ 鉄の神様よ
Bon dieu de pierre meulière !	石臼の神様よー

原作品の出典は『蘭国神謡傑作集』常陸國の部 または下総國の盆歌の部となっている。歌の大意に翻つて 一方の原作品では盆に踊らない人々の描写 他方のクロードの“翻案”では「佛」(Bouddha)は「神様」(Bon dieu)に代わり 蘭聖人の祝日に反抗する不信な若者の歌にもおけるものである。つまり 原作品やポノ一訳では 人はみな踊るべきだというのが クロード

ルの「翻案」ではキリスト教的な発想によって、まったく逆の意味となり、踊るく老てはない死者の日に踊りたいという要求の歌になってしまつたのである。もちろんクローテルは邦人の訳文を読んで、原作品の本意を理解していたはずである。しかし、ここではあえて共通の語彙を使いながらも、全く逆の意味の詩を創つたことしたのである。手法として日本詩歌によくみられる「本歌取」と同じように、題材の一部を流用しながら、全く新しい意味合いをその題材に与えるという躰まえ方なのである。シヤクリヌ・ピシヨール氏による、

本歌取りという技法の普及によって、歌人は他の歌人たちが既に開拓した領域に入り、そこで自分の想像力を働かせながら他人の題材・イメージ・語彙を自分のものにするものになつてしまつてしまつていくのである。(中略)それは単なる解説とは違い、古人たちと競つたような、古人の領域から出発した自分だけの独創的な物の見方を発展させることである(20)。

こうした共同的诗作法は『日本短詩集』にも使われており、クローテルが日本から学んだものともいふことができるかも知れない。

## 六 結論 クローテルの共同的诗作の意味について

『日本短詩集』においてクローテルは様々な技法を使いながら日本の原作品をフランスの詩に置き換えるものとしていくことが明らかになった。その技法として、クローテルの文学的感覚に導かれた原作品の選択のしかた、脚韻の使用による音調の交換、原詩の豊饒的な性格を強調するよつな比喩表現の多用、本歌取的な題材の流用をみしめることができた。『日本短詩集』にみるクローテルの姿勢は、原作品の性格に応じて、ときには控え目であり、ときには大胆な発想を吐露しているものである。このよつな詩作法は、本来、西洋の譯文学においては詩人の創作として認められていない姿勢であるといえよう。事実、クローテルのこの試みが行われるまで、これほど複雑な相互影響による共同的诗作は、フランスで発表されたことはなかったのである。しかもクローテルは一九三二年以降も、同じ作法に頼つて『中国語による短詩集』(Petits poèmes d'après le chinois) や『続・中国語による詩集』(Autres poèmes d'après le chinois) を発表している(21)。やはり『日本短詩集』は、老詩人の詩的発想力の衰えを補つたものとしての試みではなかった。逆に、新しい詩作法の可能性を試すための作品であつたとみられる。クローテルの創作は、日本の原作品の「西洋化」ともいふべきものが多いが、その基本的な創作姿勢は西洋詩学では考えられないほど共同体的なものであり、日本譯文学によくみられるよつな詩作法である(22)。また、ひとり詩人の主体性を超越したよつな共同的文芸創作こそ、晩年クローテルが目差したといわれている「聖徒の交わり」の精神にふさわしい創作であつたに違いない。たとえばクローテルは「聖くネイトウト頌歌」の一節に共同体的唱和を次のよつに添えている。

互いに眼を押し合つて調まつ。全体の調和の回復に必要な眼をそれぞれ押し合つて。(譯文)

未訳) (3)

つまり、日本の本歌・本説取の直接的影響が、晩年のクローデルのこうした作風を導いたものであるかについては明らかではないが、外交官の闘歴を終えたばかりのクローデルが、第一次世界大戦の直前、日本の農民と座を組みよつた共同的歌作に取り組んだこと、西洋文学の固有概念を遙かに超越したもので、歴史的な意味があると思われるのである。

註

(1) *DODOITZU, Dodoitsu de Paul Claudel*, Gallimard, 15/5/1945

(2) だどいずのトクトク版を参照。Paul Claudel, *Œuvre poétique*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1967, pp. 766-783

(3) 筆者の知る限りでは Rihakou Harada (原田リハコウ) の選集は不明である。おそらく当時パリで留学をしていた日本人画家でもあるので、*DODOITZU* の挿し絵三〇頁を鑑賞すると、作風は和風の素朴な水彩画と思われる。

(4) *Petits Poèmes japonais in La Revue de Paris*, 15 nov 1936, p.261

Ces poèmes sont très librement adaptés ou inspirés de compositions paysannes dites *Dodoitsu*, dont M. Georges Bonneau, professeur à l'Institut franco-japonais de Tokyo, a publié un recueil infiniment précieux.

(実際、シムール・ゴッーは東京の日本学研究所長、高橋の日本学研究所の教授であった。)

(5) BONNEAU Georges, *Anthologie de la poésie japonaise*, Paul Geuthner, Paris, 1935

(6) トクトク版(注2) p. 1154を参照

(7) BONNEAU Georges, *L'Expression poétique dans le Folk-Lore japonais*, Paul Geuthner, Paris, 1933 三冊本 vol I, *Poètes et Paysans : le vingt-six syllabes de formation savante*, (第一巻・ 詩人の農民 学識の十二詠) vol II, *La tradition orale de forme fixe : la chanson de vingt-six syllabes*, (第一巻・ 定形詠の口承文学 十二詠の歌) vol III, *La tradition orale et formes libres : la chanson du Kyûshû* (第二巻・ 口承文学と自由律 九州の歌)

(8) 一句目の意味に関して「野面も」と「野も瀬も」という二つの説がある(『山家集母歌』・新日本古典文学大系62・岩波書店・一九九七を参照)。ゴッーは「野も瀬も」とよんで torrents (急流 激流) と訳し、クローデルもそれに従った。

(9) 芳澤徹「クローデルの『どどいず』から」(『淡交』、一九九七・六 p. 27)。単行本『ひびきと詩心』(TBSブリタニカ・11001)にも所収

(10) 同『淡交』、一九九七・五 p. 27

(11) 堀口大吾訳『ヴェルレーヌ詩集』(小沢書店・一九九六)

(12) 『日本短詩集』の原作品について 第二節を参照

(13) 原作品の選択のしかたに関しては、クローデル自身の伝記的資料の影響もみられるかも知れない。『日本短詩集』の成立は一九三六年の夏とされているが(トクトク版 p.

1154を参照)、『最近出版されたクロードルの愛人ロザリー・シボールに関する研究 (Thérèse Mourlevat, *La passion de Claudel La vie de Rosalie Scibor-Rylska*, Éditions Pygmalion, Paris, 2001, p.204) によると、クロードルはその一九二六年の愛人ロザリー・シボール婦人と彼女との間に生まれた娘ルイズをともにして、南仏コートダジュールの旅に出かけたといふ。あるいは素朴な恋の歌が多く含まれている日本民謡の選択のしかたには、クロードルが三〇年以上付き合っていた愛人に対する戀いの面影をみることもできるかも知れない。また、一九四五刊行『都々逸』の序文によると、この詩集を歌詞にした歌曲を「マリー・シボール嬢」(Mlle Marie Scibor)という女性が歌ったことがあると書かれている。以上の伝記研究によると(p.274を参照)、マリー・シボールはクロードルの愛人ロザリーの妹であったといふので、やはりこの詩集の創作とロザリーとの関係を見とめることができるであろう。シヤック・ブテラー氏の注釈によると(フリュイト版 p.1153)、一九二八年の初めにルクセンブルク公国立放送局において、その歌曲の何曲かがすでに演奏せられたといふ。歌曲の作曲家に関しては、ロザリーとクロードルの娘 Louise Vetch (1905-1996)が書いたものであるといふ説がある(楽譜は行方不明である)。

(14) 詩集の順序立て・續集に関しては、中條忍氏の研究 *Dodoitsu de Paul Claudel* (『日仏文化』・二三号・日仏会館・一九六八・三)を参照。『日本短詩集』の段階では、クロードルはほとんどポノーの『日本詩歌選集』の作品順序を守っているが、一九四五年版『都々逸』では「神の愛くの道」を演出するよつな趣向がみられるといふ。また、クロードルによる詩集の續集のしかたに関して、日本駐在中の作品『巨厨帖』(本論文 第 部 第一章)を参照。

(15) ハルオ・シムネ「日本の詩歌と文化くのみつろみ」、『招集の風景 文化の記憶』(角川書店・二〇〇一、p.36)

(16) 小林隆彦『歌詞の比較文学的考察』(早稲田大学出版部・二〇〇一、p.752)。  
また、俳文学における題詞の使用に関して、本論文 第 部 第一章を参照。

(17) 『一茶全集・別巻』(信濃毎日新聞社・昭和五三)に所収

(18) *La fin des terroirs - La modernisation de la France rurale, 1870-1914*, Eugen J. Weber, Bernard Génès, Antoine Berman, Librairie Arthème Fayard (Éditions Recherches), Paris, 1983 p.604 を参照。(マフハ説)

(19) 本論文 第 部 第一章を参照。

(20) Jacqueline PIGEOT, *Questions de poésie japonaise*, Presses Universitaires de France, Paris, 1997, p.55 (マフハ説)

(21) この作品に関して、Machiko KADOTA (肥田真知子), *Petits Poèmes d'après le Chinois de Paul Claudel et le recueil de poèmes de Tsen Tsong Ming* (L'OISEAU NOIR ・日本クロードル研究会・一九九七)を参照。

(22) 日本文学にみる共同的創作よいう特徴について、加藤周一「日本文学の特徴について」『日本文学史序説』上(『加藤周一著作集』平凡社・一九七九 p.25)や高橋謙孝『文芸の心理学』(日本教文社・昭和三〇 p.67)などを参照。

(23) 藤村道夫『ホル・クロホルの作品における聖徒の交わり』(サンパウロ・二〇〇〇 p.284)を参照。

## 第二節 出典研究 翻訳

典拠・・・ Paul Claudel, *Petits Poèmes japonais*, *La Revue de Paris*, 15 novembre 1936

凡例・・・ 以下、頻繁に使われる出典を次のように省略した

- ・『山家鳥虫歌』・・・『山家鳥虫歌』（一七七六年刊行）、新日本古典文学大系62（岩波書店・一九九七）
- ・『日本歌謡類聚』・・・大和田建樹編『日本歌謡類聚』（下）（博文館・明治三二）
- ・『俚謡集』・・・『俚謡集』、文部省（国立教科書共同販賣所・大正三）
- ・『諸國俚謡傑作集』・・・湯朝竹山人編『諸國俚謡傑作集』（辰文館・大正四）
- ・『日本歌謡集成』・・・高野辰之編『日本歌謡集成』第六卷（春秋社・昭和三）
- ・『日本歌謡集成』・・・高野辰之編『日本歌謡集成』第十二卷（春秋社・昭和四）
- ・シムルシゴ・ホー一編『日本の韻律 日本民話における詩的表現』（グートネル社 一九三三）3冊本 一万国語版

EPFJ I : BONNEAU Georges, *L'Expression poétique dans le Folk-Lore japonais*, vol I, *Poètes et Paysans : la vingt-six syllabes de formation savante*, Paul Geuthner, Paris, 1933, 104 p.

（第一巻・・・ 詩人の農民 学識の十二語）

EPFJ II : BONNEAU Georges, *L'Expression poétique dans le Folk-Lore japonais*, vol II, *La tradition orale de forme fixe : la chanson de vingt-six syllabes*, Paul Geuthner, Paris, 1933, 192 p.

（第二巻・・・ 定形詩の口承文字 十二語の歌）

(BONNEAU Georges, *L'Expression poétique dans le Folk-Lore japonais*, vol III, *La tradition orale et formes libres : la chanson du Kyûshû*, Paul Geuthner, Paris, 1933, 189 p.)

（第三巻・・・ 口承文字と自由律 九州の歌）

・APJ・・・シムルシゴ・ホー一編『日本詩歌選集』（グートネル社 一九三五）

BONNEAU Georges, *Anthologie de la poésie japonaise*, Librairie orientaliste Paul Geuthner, Paris, 1935

はこの日本語の出典作品を採る（EPFJ I & EPFJ II に拠る）。

はホー一が翻訳した のこのへく語訳を採る（APJ に拠る）。

はクロートルの作品を を採るというものを採る（Paul Claudel, *Petits Poèmes japonais*, *La Revue de Paris*, 15/11/1936 に拠る）。

は筆者による（クロートル作）の日本語訳を採る。

I' RIZIÈRE A LA PREMIÈRE AUBE

Vers quatre heures du matin, j'arrache 七つむかりん  
Les mauvaises herbes de la rizière... 田の草とねば  
Mais qu'est ceci : rosée de la plaine, 野辺の露かや  
Larmes de la peine ? 涙かや

L'ARRACHEUSE D'HERBES

草取り女

J'arrache l'herbe, j'arrache la mauvaise herbe ! 私草を取る 悪草を取るー  
Mais la douleur ? mais le souci ? 悲しみは 悩めば それはまた..  
J'arrache l'herbe ! j'arrache la mauvaise herbe ! 私草を取る 悪草を取るー  
田歌..

『山家集田歌』 和泉 80 (ただし「野辺」ではなく「のほ」= 苗葉になっている)。「日本歌謡類聚」 和泉国 益禮郡 p.399° EPFJ II 近畿地方 125° APJ 1°

I' LA COUPEUSE D'HERBE DU MATIN

Voici qu'elle s'est mise à chanter, したひ田したち  
La coupeuse d'herbe du matin : あれ草刈りが  
Voix encore noyée de sommeil, ねむたねねで  
Faible-faible ! ほそほそと

LA FAUCHEUSE

草刈り女

Tout bas tout bas tout haut 小根で 小根で また大根で  
La Faucheuse la Faucheuse 草刈り女 草刈り女は  
Elle chante à coups de faux 鎌を打ちながら歌つのだ  
La Faucheuse la Faucheuse 草刈り女 草刈り女は  
On l'a fait lever trop tôt 早起きをせむせられたんが  
*Hoso bosoto!* ホソボソト°

田歌..

『日本歌謡類聚』 豊前 伊都国三重郡孤野村 p.265° EPFJ II 近畿地方 147° APJ 5°

III' AUX DANSES DE LA FÊTE DES MORTS...

Aux danses de la Fête des Morts, 盆のまじりに  
Pour ne pas danser, faudrait être 踊らぬやつは

Bouddha de bois, bouddha de fer, 木佛金佛  
 Bouddha de pierre ! 石仏とけ

A LA FÊTE DES MORTS

死者の日に

Bon dieu de bois bon dieu de fer 木の神様よ 鉄の神様よ  
 Bon dieu de pierre ! 石の神様よー  
 A la fête des morts 「死者の日に  
 Tu n'iras pas danser ! 踊りに行くな」し  
 A la fête des morts だれに言われても  
 Qui peut m'en empêcher ? 「私は死者の日に踊るよー」  
 Bon dieu de bois bon dieu de fer 木の神様よ 鉄の神様よ  
 Bon dieu de pierre meulière ! 石臼の神様よー

耳書・・

『諸国俚語傑作集』 長陸国 p.71 & 下総 盆唄 p.65° EPPJ II 九州 2° 『日本歌謡集成』 茨城  
 県 新治群 盆唄 p.71 (ただし「木佛」ではなく「持佛」もある)° APJ 9°

Ⅳ ÉCHOS AU MATIN

Les coqs vont chantant-chantant; 鳥かほのほのほ  
 La nuit va s'ouvrant-s'ouvrant ; 夜かほのほのほ  
 Et la cloche doucement tinte 鐘もなりまわ  
 De temple en temple. 寺々に

MATIN

朝

Un coq fait cocorico | 羽の響かコクコクコ  
 Un autre lui fait écho いたまのまのこり かのー 羽か...  
 Tin tin tin tin tin ! コーハコーハコーハコ  
 C'est le matin. 朝かきた

耳書・・

『山家鳥出歌』 阿波 331° 『俚語集』 徳島県 美馬群 藍いなり p.511 | 「うじほのほのほ  
 夜かほのほのほ おられや お寺の鐘かなる。ハコハカト」もある° 『諸国俚語傑作集』 讃岐国  
 高松県 p.175 & 徳島県 藍いなり p.212 (ただし徳島県は「うじほのほのほ 夜かほのほ  
 のほ おられやお寺の 鐘かなる」もある)° EPPJ II 四国 70° APJ 11° 「ほのほのほ」は九州  
 方面に「響の響く根のちまきこり」(『日本諸国語大辞典』)°

ㄏ GRENOUILLE DANS L'EAU

Quand j'entends chanter	水に蛙の
La grenouille dans l'eau,	なぐり蛙を土に
Des choses passées	たれし昔を
Il me souvient.	思はぬへ

LE CRAPAUD

蟾蜍 (かまきり)

Quand j'entends dans l'eau	水に居る蟾蜍の
Chanter le crapaud	つたうを聞く
Des choses passées	過去のいふに だけ
J'ai le cœur mouillé !	心がぬれる

田鼠・・

『山家集虫歌』 田鼠 377° 『日本歌謡類聚』 田鼠 雀躍歌 p.445° 『諸国俳諧歌作集』 田鼠 雀躍歌 p.192 & 佐渡国 雀躍歌 p.139 (ただし上七は「土手の蛙の」もある)° 『日本歌謡集成』 京都府 舞鶴歌 投節の古謡をいふ (ただし上七に「野辺に蛙の」もある) p.333 & 大分県 雑謡 (ただし上七は「土手の蛙の」もある) p.638° EPFJ II 九州 16° APJ 14°

ㄥ COUCOU

Seule en ce chemin de montagne,	ひらひら山道
Je frissonne de peur :	物凄じけもの
Allons, chante vite,	早くい蛙を
Coucou !	ほいほい

SOLITUDE DANS LA MONTAGNE

三〇禁じれ

Seule dans la montagne	三〇中 独り
Trois heures après midi	午後三時
Seule dans la montagne	三〇中 独り
J'ai peur aucun bruit...	いねいも 音ひいひなし
Alors chante, hototogisou ! (1)	ね ホトトギス(一) 歌えよ
J'ai peur, j'ai peur	いねいも いねいも
Alors chante, hototogisou	ね ホトトギス 歌えよ
Hototogisou !	ホトトギス一

(1) C'est le rossignol japonais.

(一) 「ホトトギス」は日本のあまのいづる鳥である

田鼠・・

『山家鳥虫歌』 大和 40° 『日本歌謡類聚』 大和国 盆唄 p.396° 『日本歌謡集成』 和歌山県 野口 童謡 p.415 に「一人山道淋してならぬ程をかけくれほしうきす」とある。和歌山県 魚津市の山間部・布施村一帯に残っている御祝儀唄「布施盆唄」（ふせたんぼし）に同歌詞ある。 EPEJ II 中国地方 78° APJ 15°

ㄗ LA MOUETTE

Là-bas là-bas, cette mouette,	あれあれ鵜か
Ne vois-tu pas qu'elle nous regarde ?	見てるぢやないか
Allons, ne pleure pas : ça revient au port,	なくなまた来る
Un bateau !	船ちやもの

LE BATEAU

船

Bonsoir, adieu, mademoiselle !	お嬢さんよ 今夜は永久にちよつなうー
Nous ne reviendrons plus !	われわれは戻つて来ないぞー
Agitez votre petit mouchoir !	その小さなハンカチを振つて 振つて
Moi, je vous tire la langue !	おれは舌を出してやるわー

田歌・・

語法からすると 舞末以降の歌謡か。『俚謡集』 岡山県 和気群 p.399 に「くやむな娘 ないして舞が 母とく帆かけ 風を待つ」といつ民謡がある。 EPEJ II 奥地方 233° APJ 42°

ㄨ LE BOITEUX

A l'ouest, sur la montagne, voyez,	西の山見や
Il y a un boiteux qui passe :	ちんぽか通る
Son chapeau tantôt paraît, tantôt	笠が見えたり
Disparaît !	かくれたり

LE BOITEUX

ちんぽ

Là-bas là-bas près de la haie	あそじ あそじ 垣根のちんぽ
Vlà le boiteux qui apparaît	ほら ちんぽがあらわれた
Il paraît il paraît	みえた みえたよ
Vlà son chapeau qui paraît	ほら 帽子がみえた
Il paraît il paraît	みえた みえたが
Le voilà qui disparaît !	ほら またみえたー

田歌・・

『日本歌謡類聚』 美濃国 海部郡 高須町 遊戯歌 p.487 『諸国俚謡傑作集』 伊勢国 雜謡 p.42 『日本歌謡集成』 三重県 四日市市 雜謡 地方特色歌 p.292 (ただし「五」に「みえんだひ」もある)° EPFJ II 中部地方一極部 169° APJ 18°

## た MOUETTES

Bateau qui part, bateau qui rentre, 出船いり船  
A chaque bateau sur les vagues, 波行く處に  
Au large, les mouettes tapagent 沖でかもめが  
En s'élevant. たちたわぐ

## MOUETTES

かかもめ  
Sous le grand vent qui fouette 大風に吹かれ  
Toutes ses voiles dehors 薄帆擡げて  
Le bateau vire de bord かもめの渦に  
Dans un tourbillon de mouettes 船首廻る°  
出歌・

不明 「沖でかもめがたちたわぐ」と類した表現が多いの民謡にもある。 EPFJ II 關東地方 207° APJ 21°

## | ○ PRIÈRE

J'ai, par temps de pluie, 雨の降る時  
Longé la rivière : 川端通れば  
La grenouille, accroupie, priaît 蛙はしゃがんで  
Pour son salut. 後生願ふ

## PLUIE

雨  
Il tombe de la pluie 雨が落ちてくる  
Il pleut sur la rivière 川に雨が降る°  
La grenouille accroupie 蛙はしゃがんで  
Elle fait sa prière. 祈りを唱える°  
出歌・

『日本歌謡類聚』 羽後 飽海郡 酒田 盆踊唄 p.418 『日本歌謡集成』 山形県 飽海群 舞踊歌 といせ節 p.150 (ただし「蛙」が欠ける)° EPFJ II 關地方 232° APJ 25°

||' NAÏVETÉ

Si je veux voir, je puis voir ;  
Conduire une barque, j'atteins la rive :  
Pourquoi mon amour, lui, n'atteint-il  
Point sa rive ?

眼れば見渡す  
舟をせしや届く  
何故にわが恋  
こゝかぬぞ

LA BARQUE TROUÉE

Avec la barque et la rame  
On atteindra l'autre bord.  
Mais avec l'amour, madame ?  
Hélas ! quel triste sort !

穴のおいた小舟  
小舟と櫂をえあれば  
対岸に着くならん…  
しかし 婦人よ  
恋はただただこぼれ-

田鼠・

『日本歌謡集成』 「吉原はやり小歌總まくり」 坊の津 p.107 寛保延享期に各地で流行した「ホニは節」に「眼れば見渡す 舟をせしや届く なせに届かぬ わが恋」があり、「佐渡舟わたれ」にも「舟をせしや届く」の文句がある EPFJ II 九州 15° APJ 28°

||' CONFIDENCE

Là-bas, ce que vous voyez,  
C'est la maison de amant :  
Et chère m'est la fumée  
Qui s'en élève.

あれにみゆるは  
殿御の屋方  
煙立つのが  
なつかしい

FUMÉE

Cette fumée là-bas qui fume  
C'est mon amant qui se consume

煙  
あそこには立ち上がる煙は  
燃えている我が恋人だ

田鼠・

『語国俚語傑作集』 武蔵国 雑語 p.57 (ただし「殿御の村よ」とある)。「日本歌謡集成」 埼玉県 雑語 p.69 & 山口県 大里郡 雑語 p.508° EPFJ II 中国地方 APJ 36°

||' PRÉSENTATION

Pour le jour de ma naissance,  
C'est le cinq du cinquième mois ;  
Et pour le nom, c'est Iris  
Qu'on m'a nommée.

わしが生まれは  
五月のいつか  
お名はおしよら (喜稱) と  
つけられた

MON PETIT NOM

私のお名前

Il fait bleu il fait bon 藍天だよ あただからだよ  
 Il fait aujourd'hui そんな日だよ  
 Il fait bon il fait bleu あただからだよ 藍天だよ  
 Et je suis née juste aujourd'hui 私はちょうど今日生まれたのだ  
 Si vous voulez savoir mon nom 私の名前を知りたいのが  
 Mon nom est Iris-bleu. 私の名前は青アヤメといふのだ  
 田根・

『日本歌謡類聚』伊勢国三浦郡孤野村 田根歌 p.263° EPFJ II 近畿地方 151° APJ 30°

Ⅰ Ⅳ OBSCURITÉ

Votre voix, je l'entends bien ; mais 耳はすれしや  
 Votre silhouette, je ne la vois : すがたは見えぬ  
 Vous êtes comme dans un trou 君は深川の  
 Le grillon ! せりせりや

COUCOU !

せせりー

On vous entend bien あなたがよく聞ける しかし  
 Vous voir pas moyen 目には見るじは見えぬ  
 Ainsi dans son trou その穴の中の  
 Le grillon Coucou ! せりせりやも — せせりー  
 Kirigirisou ! せりせりやもー

田根・

『山家鳥虫歌』和泉 81° 『日本歌謡類聚』和泉国 盆踊歌 p.399° 『諸國俚謡傑作集』紀伊国 雑謡 p.170 (ただし「様は深野の せりせりや」とある)° 『日本歌謡集成』 「古原はやり小歌總まぐり」 坊の津 p.107 (ただし「...姿は見えし 君はふかみの せりせりや」とある) & 「淋敷屋之庭」 なげらじ p.164 (「耳はすれしも 姿は見えぬ 君は深野の せりせりや 深野の君は 君は深野の せりせりや」とある)° 『日本歌謡集成』 秋田県 南秋田群 雑謡 p.137 & 和歌山県 雑謡 p.415° 各地の民謡(草刈唄など)にもある° EPFJ II 近畿地方 115° APJ 33°

Ⅰ Ⅴ LES TROIS CLARTÉS

La lune à l'est ; 月はおかしに

Les Pléiades à l'ouest ;  
 Mon bien-aimé  
 Au milieu.

すばるほむに  
 こゝろのいと  
 まん中に

PARTOUT

至る所に

La lune au levant  
 L'étoile au couchant  
 La lune là-haut  
 L'étoile dans l'eau  
 Sens dessus dessous  
 Mon amant partout !

月は東に  
 星は西に  
 月は高上に  
 星は水面(みづも)に  
 上下もなし  
 我が恋人は 至る所にー。

田鼠・・

『山家集虫歌』 丹後 250° 『日本歌謡類聚』 丹後国 金鐘唄 p.428 (ただし「月は東に 座るは西に..」とある)、『諸国傳説傑作集』 丹後 金鐘唄 p.148 & 淡路国 雑謡 p.173 (ただし淡路国は「御屋形様は まん中に」)° EPFJ II 九州 34° APJ 37°

一六 VISAGE

Dans l'eau vive que j'ai puisée  
 Si je regarde mon image,  
 Je rougis de le dire, mais, eh,  
 Jolie femme !

くんだりみづで  
 がげを見れば  
 わかみながらも  
 よい女御

MA FIGURE DANS LE PUIT

井戸の中の私の顔

Ma figure dans le puits  
 Pas moyen que je me l'ôte  
 Ma figure dans le puits  
 Pas moyen que je me l'ôte  
 Et que j'en mette une autre  
 Et si l'on me trouve jolie  
 Tant pis ! c'est pas ma faute !

井戸の中の私の顔を  
 搦るじうができないわ  
 井戸の中の私の顔を  
 搦るじうができないわ  
 別の顔に換えるじうもできないわ  
 美人といわれたら  
 そつ 仕方がない、私のせいではないのー。

田鼠・・

『狂言小歌集』 24 大蔵淡路猿 (藤田徳太郎編『閑吟集』・岩波書店・昭和七 p.46) に「汲んだる清水で髪見れば 我が身ながらもよい殿御へ」がある° EPFJ II 四国 52° APJ 44°

| 十 CONVERSATION

La nuit où je pense à lui, 思ひ出す夜は  
L'oreiller et moi, nous causons : 枕しかたろ  
Oreiller, vite, parle-moi, まくら物しく  
L'amour me brûle ! じがるゝに

L'OREILLER

まくら

La nuit quand je pense à lui 夜 彼のじしを想ひし  
L'oreiller et moi on cause まくらと語りあひのだ  
Écoute, petit oreiller ! 聞いてよ 小ねなまくらも  
Je l'aime ! Je l'aime ! 私に彼を愛してゐる 愛してゐるのよー  
おん

『日本歌謡彙成』 「和歌はやり小歌總まぐり」 雪井のつとむ p.108 & 「淋敷座之戀」 耳齋  
土井豊直らじ (一六七六年成立) p.161° EPFJ II 九州 20° APJ 47°

| 十一 L'AMOUR MUET

Brûlant d'amour, les cigales 恋にじがれる  
Chantent : mais combien plus belles 鳴くせみよりも  
Les lucioles dont l'amour muet なかぬ螢か  
Brûle le corps ! 身をじがす

L'AMOUR MUET

恋はもの言わぬ

Chante pour ma fête 祝ひの日だから  
Cigale à tue-tête ! 蝉よ あらゝ限りの語で歌えよー  
Mais combien c'est mieux だけよ やつぱり 螢のだから  
Cette mouche à feu いいな...  
Qui sans aucun bruit 音一つなく  
Brille dans la nuit 夜に輝くその体  
L'amour lui brûle le corps ! その体こそ恋に焦がれるー  
おん

『山家鳥虫歌』 山城国風 11° 『河原語園』 にもあり、『都々逸拾遺』 (博文館・明治三五)  
p.126 に「古入」の作品として載っている。『日本歌謡彙成』 (ただし十五に「恋しく／＼」とも  
ある) 山城国 雑歌 p.374 & 大和国 系引歌 p.260° 『諸国傳説傑作集』 山城国 雑歌 p.4 &  
菅原国 潮来(うた)節 p.72° EPFJ II 近畿地方 116° APJ 49°

Ⅰ ㇶ FEU SANS FUMÉE

Dans mon cœur, une douloureuse	胸でくるしむ
Flamme brûle : mais	火はたくけぬ
Aucune fumée ne monte, et	煙たふなほ
Personne ne sait.	人知らぬ

FEU SANS FUMÉE

煙の立たない火

Connaissez-vous, ma bien-aimée,	私の恋人を「存じでしよつ」。
Ce feu qui brûle sans fumée ?	煙の立たない火の炎。

田歌・・

『山家鳥虫歌』 櫻津 117° 『日本歌謡類聚』 櫻津国 雀踊歌 p.401° 『諸国佳話傑作集』 櫻津 雀踊歌 p.14° 古今集一一卷に類歌あり。「高曲神戶節」（都々逸節）には「わしが胸では火をたくけぬ 煙田たなほ せやしらぬ」とある。EPFJ II 近畿地方 124° APJ 50°

Ⅰ 〇 L'AMOUR AVEUGLE

Parce que je vous aime,	「あなた思へば
Plaines, torrents, montagnes,	野もせも山も
Broussailles, forêts,	やぶも林も
Sans rien voir, je suis venue.	知らて来た

D'UN SEUL BOND

「つひつひと

Je t'aime je suis venue	君が好きて私は来た
Les torrents et les montagnes	激流も山も
Les forêts et la campagne	森も野原も
Je ne m'en suis pas aperçue !	なにひとつ目に入らぬ

田歌・・

『山家鳥虫歌』 山城国風 21° 『日本歌謡類聚』 山城国 雀歌 p.375（ただし下五に「しらていく」とある）。愛知県の「梅もつり歌」にも「そなた思へば やれ野も山も 森も林も 知らて来た」として類歌がある。EPFJ II 近畿地方 118° APJ 52° 「野もせも」は「野面も」の意味か「野も瀬も」かは不明である。ボノ一歌（ ）は「野も瀬も」の方をうつしている。

Ⅰ 一 〃 FRUITS A TERRE

J'ai lancé ma corde à crocher ;	かぎを投げかけ
---------------------------------	---------

Je secoue : tombez, arbouzes... 揺る心は揺る心  
 Mais vous, homme au cœur cruel, 心は心は揺る心  
 Tombez-vous pas à votre tour ? 揺る心は揺る心

ET ALLEZ DONC !

Je secoue l'arbre, allez donc ! 揺る心 揺る心 木を揺る心  
 Allez donc et allez donc ! 揺る心 揺る心 揺る心 揺る心  
 Tombez, beaux fruits, il en pleut ! 美しき果物も 落ちてくれ 降ってくれ  
 Tombez tous tant que ça peut ! 落ちるだけ落ちてくれ  
 Mais ton cœur, sacrée bonne femme, 心は 女子 (おんな) も  
 A force de le secouer 揺る心 揺る心 揺る心  
 Finira-t-il par tomber ? 心に落ちてくれるのか？

おん歌...

『山家山歌』 山城国風 20° 『日本歌謡雑纂』 山城国 録歌 p.375 (ただし七・七・七・七・五調心 附に「おんなはなれし」しもある) ° EPFJ II 九州 6° APJ 56°

||| UNIONS

Sur le prunier, le rossignol ; 梅にさし鳥  
 Le cerf au pied de l'érable ; 紅葉に鹿も  
 Et vous et moi mêlés comme 私とお前は  
 Poisson et eau ! 魚と水

POISSON

魚

Le cerf parmi le mélèze 落葉松 (かろまき) の中には牡鹿  
 Le pinson dans le bouleau 白樺の中には花鶯 (あまういす) が  
 Et nous tous les deux mêlés そして私たちが  
 Comme un poisson dans l'eau 魚と水のまじりに 結ばれた

おん歌...

『潮来風』 (うたがら) | 五国雑歌 (早川純三郎編) 『近世文芸叢書』 第一二巻 『俚謡』 ・ 国書刊行会・昭和四五年 p.389) ° EPFJ II 近畿地方 145° APJ 61°

||| AIGUILLE DE PIN

Nous sommes, vous et moi, わしとお前は  
 Les deux moitiés d'une aiguille de pin, 双葉の松も

Qui se dessèchent et qui tombent  
Sans se quitter.

枯れて落ちても  
はなれまい

AIGUILLE DE PIN

松葉

Vous et moi, ma bien-aimée,  
Nous sommes les deux moitiés  
De cette aiguille de pin.  
Sécher, oui. Se lâcher, point !  
お歌・・

恋人よ、あなたと私は  
一本の松葉のよこた  
乾いていくじは はい、それはある  
離れるじは いや、それはない。

『日本歌謡類聚』 会津郡 流行歌 p.70° 『日本歌謡集成』 福島県 南会津群 雑謡 相馬  
節 p.95° 柳ヶ瀬節の古文句に雑謡の「じはれ松葉を あれ昆やしゃんせ 枯れて落ちても 二人  
連れ」もある° EPFJ II 歌地 249° APJ 62°

Ⅰ 四 L'EAU DES RIZIÈRES

Comme les champs la pluie du cinquième mois,  
Jadis vous m'attendiez d'amour :  
A présent, des rizières d'automne  
L'eau qu'on rejette !

五月初雨  
じつじのはれ  
今は秋田の  
落水

ET D'AUTRE PART...

それにもた...

L'eau s'en va de la rizière  
L'eau s'en retourne à la rivière.  
Hélas, c'est comme l'amour !  
On ne peut pas s'aimer toujours.

水は田圃からひき  
水は川へ歸り  
ああ、恋もまた  
永久につづかならぬ

お歌・・

『山家山田歌』 河内 63° 『日本歌謡類聚』 盆踊歌 河内 p.397° 『俚謡集』 山口県 袴  
たし p.524 (ただし「五月初雨し じつじにたれとも...」もある)° 『讃国俚謡傑作集』 河内 盆  
踊歌 p.11 & 佐渡国 雑謡 p.141° EPFJ II 九州 31° APJ 72°

Ⅰ 五 PAYSAGE

Sous la neige qui tombe-tombe,  
Plaine et montagne vont sommeillant :  
Seul défiant le sommeil,  
Le moulin à eau.

雪は降る降る  
野山は眠る  
ひとり眠らぬ  
水車は

LE MOULIN

Sous la neige qui commence

La montagne a fait silence

Mais sensible à l'eau qui court

Le moulin tourne toujours

田舎・・

EPFJ I 67 信濃の大畠 | 雑作° APJ 115°

水車 (みづぐるま)

降り始める雪のなか

山は黙ったまま

水車 (みづぐるま) は流れを感じて

うせりに回る°

田舎 TÉNACITÉ

Escargot,

Tout doux, tout doux, va, monte

Le Fuji !

蝸牛

そろ／＼登れ

富士の山

L'ESCARGOT ALPINISTE

L'escargot à l'escalade

Sac au dos s'est mis en campagne

L'escargot à l'escalade

Va digérer la montagne !

田舎・・

登山家かたごもり

山を登るかたごもり

リュックを背負って遠征くまかたご

山を登るかたごもり

山を食み尽へものだー

| 松本屋後刊の『文政版』 | 松本屋後 (文政二二) に「不登地」の向うに記す。富士隊の富士登攀を詠んだ作品が。また『文政同帖』に「蝸牛しむしも不／＼上る也」(文政六甲)や「蝸牛返永に不／＼上る也」(文政八)という雑句がある° APJ 244°